

指導案：マーク・トウェインと金めっき時代のアメリカ

1．対象：高等学校 総合的な学習の時間 1時間～2時間程度

2．学習目標：

マーク・トウェインの生涯と著作について学習する
金めっき時代のアメリカ社会の様々な面について学習する
現代の社会状況を多角的に捉える姿勢を身につける

3．指導観：

19世紀後半「金めっき時代」のアメリカの経済的・産業的な発展と、それに伴って生じた社会問題を取り上げることで、歴史の明部・暗部それぞれに目を向けさせる。

マーク・トウェインの生涯・作品について取り上げ、彼が貧しい少年時代から社会的・経済的な成功を収めるまでをたどるとともに、著作からの抜粋を用い、彼の批判やユーモアに満ちた、単純ではない時代観をさぐる。

を通して、社会や歴史に対する、多角的な理解の重要性を理解させることを目的とする。なお板書は固有名詞や年号等、必要最小限にとどめ、プレゼンテーションソフトやOHCなどを効果的に用い、時代のイメージをつかみやすくするために、写真やイラストなどの視覚教材を多用する。

4．使用する教材：

19世紀後半のアメリカ社会を紹介する視覚教材。

マーク・トウェインの生涯を紹介する視覚教材。(に関しては、[5．授業展開] で個々に例を提示する。指導案末の参考文献や、インターネット上の資料などから写真や絵を抜粋する)

マーク・トウェインの作品からの抜粋(翻訳)、『金めっき時代』のトウェインによる「序文」(イギリス版) や、作中での人物像、議会の腐敗等の描写を用いる。作中からの抜粋を用いる場合、見方が一面的にならないように複数使用する。教師は作品全体や背景、社会的意義について適切に把握している必要があり、生徒に対し、必要に応じた解説を行う。

その他使用に適すると思われる著作) 『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(16章、26章など) 『苦難に耐えて』(40～41章など) 『王子と乞食』(2章など) など。『王子と乞食』は16世紀のイギリスが舞台であるが、華やかな宮廷と貧困にあえぐスラムの対照的な描写が、執筆当時のアメリカ社会を反映していると考えられる。

5. 授業展開

	活動の内容	教師の動き	生徒の活動	留意点	視覚教材
導入	「黄金時代」のイメージ	黄金時代という言葉からどのような時代をイメージするか、生徒に発表させる。自発的な回答がなければ指名する。	教師の質問に対し、自分なりの考えで答える。	様々な面で円熟した時代、というイメージを引き出す。	
	「金めっき時代」ということばの提示	アメリカの歴史に、黄金時代に対して金めっき時代と呼ばれる時代があることを提示する。			
	本時の学習内容の確認	「金めっき時代のアメリカと、マーク・トウェイン」(板書等)		あわせて英語表記(The Gilded Age)も紹介する。	
展開	1. 金めっき時代の定義づけ	《金めっき時代の概観を説明する》	教師の解説を聞く。		
	・時代	具体的にいつごろかを説明(板書等)する。			
	・マーク・トウェインの小説の題から名づけられた	トウェインが19世紀アメリカの重要な作家であることも合わせて説明。同時に金めっき時代における彼の重要性についても触れ、展開4の導入とする。			
・「黄金」と「金めっき」の対比	「黄金」時代と違い、「金めっき」時代には様々な問題があったことを説明する。 この時代にアメリカが		「黄金時代」と対比させることで、「金めっき時代」がどのような		

		華々しい発展を遂げたこと、社会問題が多く生じたことを、「金めっき」というイメージで理解させる。		時代であったか、その名前からイメージさせる。	
2. 発明と発展の金めっき時代		《「金めっき時代」のアメリカにおいてどのような発展が見られたかを理解させる》	教師の解説を聞きながら示される視覚教材を見る。必要があれば質問する。	この項では金めっき時代に対して生徒がマイナスイメージを持つことがないように留意する。	
・ 様々な発明、産業、交通・輸送の発展		19世紀後半の発明家や発明品、都市や鉄道等の写真やイラストを用いながら説明する。		スケールの大きい例を用いると効果的である。	エジソンと白熱電球、ベルと電話、大陸横断鉄道、高架鉄道、当時の都市、機械等の写真
・ 印刷機の進歩		機械発明品の一例として印刷機の例を提示。次第に大型化し効率が上がったことを説明する。			1840年頃から1890年頃までの印刷機を、写真等で図示
・ 富裕層の出現		ヴァンダービルト、カーネギーらがどのように富と社会的地位を得たかを簡潔に説明する。どれほどの資産を手にしたかなど、数字でも提示する。		現在の日本経済について触れてもよい。	ニューヨークなどのヴァンダービルト邸等の写真
3. 金めっき時代の社会問題		《金めっき時代の民衆、特に社会下層部の人々の生活がどのようなであったかを理解させる》		教師の解説を聞き、図を見る。必要があれば質問をする。	産業・経済発展に伴って社会問題が生じたことを理解させる。

	・環境汚染	空気汚染やごみ問題など、都市部の環境汚染実態について解説する。			ニューヨークの環境汚染実態を描いた当時のイラストや、写真
	・労働状況	苛酷な労働環境や搾取の実態、また女性や子ども、移民といった労働者の内容についても説明。産業の発展と密接に関係していることを理解させる。			搾取工場の写真、労働実態を示す当時のイラスト、写真等を多く提示
	・貧困 住居（ スラム街の 生活の導入 として）	貧しい民衆がスラムでどのような生活を送っていたかを理解させるため、住居を例に用いる。展開2で示した邸宅をもう一度提示したのち、同じニューヨークで貧困層が住んでいた家のイラストや写真を提示する。			ニューヨークのヴァンダービルト邸の写真、ニューヨークの建物の対比を風刺する絵、テネメントハウスの実態を描いたイラスト等
	・貧困 スラム街 の生活	スラム街とはなにかを説明し、その生活実態を解説する。下層社会の人々の生活が当時どのようなようであったかを理解させる。			当時のスラム街の写真（複数） 路上生活をする子どもたちの様子等
	4 . マーク・トウェインの生涯と作品	金めっき時代の重要な人物として提示する。金めっき時代を批判しながらも、その中で生きた作家の生涯と作品	トウェインに関して知っていることがあれば、挙手等で発言する。		顔写真、著作(翻訳)等

		について理解させる。 余裕があれば、トウェインを導入する際に生徒の発言等を促し、生徒がどの程度知っているかを把握する。			
・貧しい少年時代から作家として成功するまで 作品にこめられた批判と風刺、ユーモア		トウェインの人生を概略的に説明する。特に貧しい少年時代から様々な職業を経て、作家として社会的・経済的な成功を収めたことを強調する。必要があればプリントを配布する。		金めっき時代を体現するような存在であること、多角的な視点を生涯を通じて養ったことに重点を置く。	トウェインの生家、ハンニバルでの家、ハートフォードの邸宅を並べて提示。ミシシッピの蒸気船の写真もしくは絵等
・投機の失敗		印刷機の進歩について学習したことをもう一度確認したうえで、トウェインがページ印刷機に多額の投資をしたことを説明する。			ページ印刷機の写真。他にもトウェインが投資を行った物の資料を提示
・作品読解		作品からの抜粋をプリントにしたものを配布する。生徒の学力にもよるが、基本的には生徒に黙読させる。	作品の抜粋を読む。	ことばや登場人物など、生徒の理解度に合わせて適宜解説を行う。	本の提示。イラストレーションなども効果的であれば提示
・グループワーク(マーク・トウェインの生涯と作品に関して意見交換)		生徒を適当なグループに分け、グループ内で生徒に感想や解釈を発言させる。机間巡視を行い、適宜解説や助言を行う。	作品やトウェインの生涯から感じたことを自由に発言する。グループ内で意見交換を行いそれをまとめる。	グループの人数は6人程度が望ましい。	

	・発表	各グループで代表を決めさせ、グループ内でどのような意見が出たかを発表させる。	グループで代表を決める。 代表になった生徒は、グループ内で出た意見をまとめ、口頭で発表する。		
まとめ	・グループワーク（金めっき時代とトウェインに関して意見交換）	引き続きグループ単位で金めっき時代とトウェインに関してディスカッションをさせる。グループを回って解説や助言をするとともに現代日本社会についても話し合うように導く。	金めっき時代やトウェイン、また現代日本社会に関して、自由に意見交換を行う。	5分程度	
	・まとめ	金めっき時代がどういう時代だったかを確認し、またマーク・トウェインという作家がその時代をどのように見えていたか、展開4で出た生徒の意見を反映させながら、簡略に説明し、まとめとする。		特に時代の多面的な捉え方の重要性について理解させる。	

資料1 金めっき時代 以下は教師が使用する資料であり、生徒に配布するものではない。生徒の能力に応じ、以下を適宜使用して解説を行う。

The Gilded Age/ 金めっき時代とは

南北戦争が終わった1865年から1890年頃までは「金めっき時代」と呼ばれる。なぜ「黄金」(golden)ではなく「金めっき」(gilded)なのか。この時代、機械化が急速に進み、資本主義社会へと変化していく中で、人々の関心は金儲けへと傾いていった。実業界に大富豪が多く出現し、活躍したのもこの時代である。しかし、資本主義の急速な成長は、人々に豊かさや便利さをもたらした一方、労働者の賃金を下げ、政治家が贈収賄にからむような政治的腐敗を生み出すなど、社会に暗い部分ももたらした。

「金めっき時代」という言葉は、マーク・トウェインとチャールズ・ダドリー・ウォーナーの共著小説(1873)の題名に由来する。この作品で彼らは、金儲けがもたらす華やかさと弊害を、風刺的に描いている。めっきのきらびやかな表面を剥がせば、質の悪い地金が見えるような、当時のアメリカ社会の様子をうまく表現しているとして、「金めっき時代」はこの時代を表す言葉となった。

「金めっき時代」における社会発展

発明、技術革新

「金めっき」時代の華やかさを作った要因に、技術の発展は欠かせない。技術の発展に伴って、より低価格で商品を提供するための研究・実験がなされ、様々なものが発明された。例えば、アレクサンダー・グラハム・ベルによる電話の発明(1876)、トマス・アルヴァ・エジソンによる真空フィラメントを使用した白熱電球の発明(1879)、ジョージア州アトランタにてコカコーラが初めて世に出た(1886)。このような発明が多々なされ、「金めっき時代」は「発明の時代」とも言える。また大型で複雑な機械が登場することで、大量生産が可能になり、様々な産業が活性化した。

技術の発展は出版にも革新をもたらした。今まで手作業でやっていたことを機械ですることで、紙や印刷にかかるコストが下がり、多くの人の手出版物が渡るようになった。出版業もまた一大ビジネスとなったのである。

交通・輸送の発展

交通の発展もこの時代の特徴のひとつである。例えば、中西部と西海岸を結ぶ最初の大規模横断鉄道がユニオンパシフィック鉄道とセントラルパシフィック鉄道によって開通した(1869)。その後も他の会社によって別の都市間が鉄道で結ばれていき、これらの交通発達によって、移動時間が短縮され、移動に伴うリスクも軽減されたことが、物資の輸送を活発にし、また西部開拓が促進され、アメリカの経済発展を促した。

成金の出現

「金めつき時代」に株の操作によって金持ちになった1人としては、アンドリュー・カーネギー(1835-1919)が挙げられる。彼は株の配当金を資本として鉄工業を始め、成功し「鋼鉄王」と呼ばれた。彼は、たとえば1900年の一年間だけで、2千万ドル(当時)以上の個人収入を得たという。また鉄道経営によって富を得たウィリアム・K・ヴァンダービルトや、「石油王」ジョン・ロックフェラーなど、巨額の富を築くことにより社会的地位を得た人々が大勢いた。ヴァンダービルト一族は、1880年代、ニューヨーク市マンハッタンの5番街に7つの邸宅を建て、またそのほかに、アメリカ各地に豪華な大邸宅を所有していた。ロックフェラー家の敷地には80近い建物、自動車50台分ものガレージがあったという。

金めつき時代の社会問題

環境汚染

19世紀末のアメリカ北部では、工業の発達に伴い、環境汚染が広がった。工場からの有毒ガスや、機関車の煙により、深刻な大気汚染が多くの街で引き起こされた。蒸気機関車は他に、振動や騒音といった問題も引き起こした。また、清掃事業やごみ処理業、下水施設等がきちんと整備されておらず、人口の多い都市部では、街中にごみや排水があふれ、強烈な悪臭のもととなっていた。

労働

産業の発達、電話や電気の発明などによって、繁栄しているかに思えた金めつき時代であったが、民衆の生活はとても苦しいものだった。

数百万人の労働者が、暗く、汚く、人々でごった返した、危険な場所での労働に従事していた。賃金は非常に安く、たとえば製鋼工場では、一日に12時間働いても、1ドル25セントにしかならなかった。工場ではおがくず、化学工場では有毒ガス、炭鉱では炭塵により、労働者の多くが、若くして健康を損なった。機械工業によって大量生産が促される一方、労働者は使い捨て的に働かされたのである。

一攫千金という大きな希望を胸に、当時のアメリカには移民も多く流入した。しかし上陸したばかりの彼らは現金をほとんど持っていなかった。衣料産業などでは、そういった移民を狙って人員を確保し、スウェットショップ(搾取工場)で、低賃金で働かせていた。その中心となったのは、ニューヨークのロウワーイーストサイド(マンハッタン島南東部)で、そこでは一日働いても数ペニーしかもらえず、家族総出で働かなければ生活できない状況であった。料理をする暇などなく、男性も女性も子どもたちも、わずかなお茶とパンだけを口にして、眠る間を惜しんで働いた。衣料関係の他にも、タバコの製造や、石鹼の包装などの仕事があったが、そのどれも過酷で、健康に害を及ぼすものばかりであった。

児童就労

アメリカ各地で、児童の就労も盛んに行われていた。7歳から16歳までの児童が、大人たちと同じ時間働き、その労働条件も非常に過酷であった。炭鉱では、12時間から14時間働いても、たった25セントしかもらえなかった。マサチューセッツ州を初めとするいくつかの州では、児童の労働時間を規制する法律が定められていたが、それを強制する手段はなかった。1870年の国勢調査によると、工場労働者だけで約70万人の児童就労者があり、その後さらに増加の一途をたどった。

スラム街の暮らし

1868年から1875年までの間にニューヨークのスラム街に暮らす人の数は、約50万人にのぼると考えられていた。当時のニューヨーク市の人口のほぼ半数に当たる。大富豪が裕福な暮らしをするのとおなじニューヨークのマンハッタン島の南東部で、移民してきたばかりの人々などが、非常に安い賃金で単純労働に就き、スラムの貧民街で暮らしていた。

ニューヨークやシカゴなどに存在したスラム街では、通りから通りへと、トイレも下水施設も、換気設備も街灯も、命の安全すらもない地区が広がり、伝染病や飢餓、飲酒や暴力、児童虐待などが蔓延していた。こうしたスラムの家庭で暴力を受けて逃げ出した子どもたちは、すりや物売りをするなどして路上で暮らし、犯罪者や売春婦などになっていった。

住居

当時貧しい人々の多くは、粗悪な住宅に住んでいた。特にニューヨークのスラムでは多くが借家に住み、家主から高額の家賃を請求されていた。

テネメントハウス... (借家という意味だが、おもにニューヨークスラム街の安アパートを指す)。非常に安価なアパート。壁にはひびが入り、床はたわみ、非常口など一つもない手抜き建築。

シャンティ...もともとはおもに炭鉱地域で、ヨーロッパからやってきた労働者たちと家族が暮らした粗悪な小屋。ニューヨークでも広がり、共同の賃貸住宅を嫌う貧民たちが住んだ。

また裕福な層はタウンハウス (隣の家と共通の壁でつながった、2階建てまたは3階建ての大家族用の家屋。都市の狭い土地に住宅を確保するために建てられた) と呼ばれる住宅に住んだが、換気が不十分であることや、石油ストーブの使用により住人の健康を害した。不必要に飾り立てられているため、非常に使い勝手が悪く、料理などの家事は大変な骨折りの仕事であった。

資料2 マーク・トウェイン 以下は教師が使用する資料であり、生徒に配布するものではない。生徒の能力に応じ、以下を適宜使用して解説を行う。

マーク・トウェインの生涯

辺境の地出身の貧しい少年時代

アメリカの作家、マーク・トウェイン(本名サムエル・ラングホーン・クレメンズ[Samuel Langhorne Clemens])は、1835年、当時まだ西部辺境の地であったミズーリ州フロリダという小さな村に生まれた。クレメンズ一家は後に同州ハンニバルに移住し、同じくフロンティアであるこの町を舞台に、後の彼の代表作『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 1876)や『ハuckleベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 1884)などが描かれることになる。

様々な職業、土地

ミズーリ州での一家の生活は経済的に厳しいものであった。そんな中で彼が豊かな生活を夢見ていたことは、『王子と乞食』(*The Prince and the Pauper*, 1881)などの作品から読み取れる。さらに11歳のとき、父ジョン・マーシャルが亡くなったことにより、サムエルは一家を支えるため、学業をあきらめ、印刷所で働くことになる。

17歳になると、ハンニバルを出て、ニューヨークなど東部の大都市を、印刷工をしながら転々とした。その後、ミシシッピ川を上下する蒸気船の水先案内人になったりもするが、1861年に南北戦争が勃発すると、南軍兵士として従軍した。

ごく短期間(2週間)で戦線から離れたサムエルは、兄とともに西部ネヴァダへ赴く。鉱山探しをするが、うまくいかず、それをあきらめた後は新聞記者として、ユーモアにあふれる記事を書き、次第に名が知られるようになっていった。1863年には、初めてマーク・トウェインという筆名を使い始め、1865年、30歳のとき、短編「ジム・スマイリーと跳び蛙」(“Jim Smiley and His Jumping Frog”)(後に「カラヴェラス郡の名高い跳び蛙」[“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”]と改題)で文壇にデビューし、次第に人気を博するようになった。

作家としての成功、結婚

またトウェインは、海外旅行の顛末を、ユーモアを交えて記した、多くの旅行記でも知られている。1867年にはヨーロッパへと渡っており、このときの通信は『赤毛布外遊記』(*The Innocents Abroad*, 1869)としてまとめられている。ヨーロッパから帰った後、ニューヨークで、後に妻となるオリヴィア・ラングドンとの交際をはじめ、1870年に結婚した。

裕福な妻と結婚した彼は、東部コネティカット州ハートフォードに立派な家を建て、3人の娘をもうける。隣人には『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1852)で

知られるハリエット・ピーチャー・ストウなどがおり、非常に知的で文化的な地域社会であった。トウェインはこの地で代表作『トム・ソーヤーの冒険』『ハuckleベリー・フィンの冒険』『王子と乞食』『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』(*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1889) など多くの作品を生み出したが、多くの作品でアメリカ南部、あるいは西部的な題材を使用している。

『金メッキ時代』(*The Gilded Age*, 1873) は、チャールズ・ダドリー・ウォーナーとの共著であり、トウェインの初めての長編小説である(トウェインが執筆したのは1~11、24~25、27~28、30、32~34、36~37、42~43、45、51~53、57、59~62の各章。35、49、56章は共同執筆。アメリカ版の序文はウォーナーによるが、イギリス版ではトウェインが単独で序文を寄せている)。19世紀後半のアメリカの投機熱や産業の発達、政治腐敗などを描いているが、トウェインの非常に興味深いところは、一攫千金を夢見て投機にはしる当時の人々や社会を批判しながらも、投機熱や利潤を追求することを必ずしも否定的にはとらえていなかったことである。西部での経験をつづった『苦難に耐えて』(*Roughing It*, 1872) においても、自らの鉱山探しの顛末を正直に記している。また『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』では、中世へタイムスリップしたアメリカ人ハンク・モーガンが、19世紀後半の技術を生かして様々な産業を興していく様子が、なかばこっけいに描かれている。トウェインは職業や土地を渡り歩く過程で、様々な地域の社会の実情を、様々な視点から見てきた。そうした経験が、彼の作品での優れた、一元的でない社会描写につながったのだろう。多様な人々を描くトウェインの筆は、彼らしく皮肉とユーモアに満ちているが、同時に金持ちになりたいという願望を当たり前のものと受け止め、温かく描いてもいる。このような人間らしく正直な人間観は、トウェインの作品の大きな魅力のひとつといえるだろう。

破産

トウェイン自身、急速に産業化・工業化していく時代の波に乗るように、いろいろな発明品に金を投資する。しかし多額の金をつぎ込んだペイジ印刷機は完全な失敗作で、結果として1894年に破産に追い込まれた。印刷工として働いていたころの経験から、効率よく大量に印刷できる機械が、どれほどの利益につながるかを知っていたための投機であった。60歳のトウェインは借金返済のために、世界一周講演旅行へと出発し、帰国して借金を清算したのちも、1910年に亡くなるまで多くの作品を生み出した。ユーモアと想像力にあふれる作家マーク・トウェインは現在でも人気があり、アメリカを代表する作家の一人である。

参考資料 生徒向け配布資料に関して(『金めつき時代』序文)

マーク・トウェインの作品からの抜粋例として示す文章は、教師が生徒・作品全体への適切な配慮と理解に基づいて選ぶ必要がある。以下に参考として示す文章はあくまでも例示であり、これを用いる場合には、適切な部分のみを抜粋し、『金めつき時代』本文よりの抜粋と合わせて用いる。

『金めつき時代』はアメリカでの刊行の後、ロンドンの出版社からイギリス版が出版された。トウェインは単独でこれに序文を載せている。以下はその訳出である。(Mark Twain, "Preface to the Routledge *Gilded Age*," Lin Salamo and Harriet Elinor Smith eds., *Mark Twain's Letters, Volume. 5: 1872-73* (Berkeley: U of California P, 1997) 643-644)

ロンドン版への作者の序

アメリカでは、ほとんど誰もが自分を社会的、金銭的に向上させようという、自分なりの夢とか計画を持っています。この、国民に蔓延している投機熱こそ、我々が『金めつき時代』で描き出そうとしたものです。投機熱は、個人にとっても国家にとっても、良くも悪くもあるものです。良いというのは、個人と国家のどちらにも、静止していることを許さないからです。個人と国家の両方を、前方にあるなんらかの目標に向かって常に駆り立てているからです。悪いというのは、その目標というのがしばしば、間違って選択され、結果として個人が破滅することになるからです。こうした個人の破滅が重なれば、国家に影響しかねない。よって、国家にとっても、悪いといえます。しかしそれでも、国民全体としては、投機熱はあった方が、そして時々そのために苦しむ方が、この特性がないよりも、当然ながら良いに決まっているのです。

作品ではまた、ある悲しいテーマにも触れていますが、それを取り扱うことは全く喜ばしいことではありませんでした。先にアメリカ政治にいつの間にか忍び込んで、わずかな間に合衆国全ての州・準州に害悪を及ぼした、恥ずべき腐敗のことです。

しかし私は、わが国の立派な未来に強い確信を持っているのです。大多数の人々は正直で実直だし、この最近の事態のために、みな奮起しています。国政に自ら参加することが人々の生活習慣となって、最良の人々だけが、責任と権威ある地位につくことができるようになるまで、その奮起が続くとしたら！ その日は来るだろうと思います。

我々の前進はもう始まっているのです。トゥイード氏(イギリスからやってきた人の子孫ですが)は、アメリカの法律と法廷をさんざんコケにした後、ついに禁固13年と重労働の刑を言い渡されました。そのことを考えるだけでも幸せになれるというものです。どこかの長官が特赦を与えるのだって、少なくとも2年は許されません。恥も外聞もない経歴を連れ、議会をあざ笑い、新聞を鼻であしらい続けてきた、あるニューヨークの大判事は、ついに衰えを見せ、威厳をはがされて、州内において公私問わず職に就くことを公に禁じられました。他にもこのような判事が一人(イギリスからやってきた人ですが)同じ打撃が自分の頭の上に落ちこちてきそうなのを見て、悲嘆のあまり、不正でもって建てた御殿の中で、潔くも亡くなったそうです。

マーク・トウェイン

参考文献

- 岩山太次郎編『金メッキ時代とアメリカ文学』(山口書店、1987年)
- 亀井俊介『アメリカ文学史講義 2 ~自然と文明の争い』(南雲堂、1998年)
- ガットマン,ハーバー・G.著、大下尚一・野村達朗・長田豊臣・竹田有訳『金ぴか時代のアメリカ』(平凡社、1986年)
- 猿谷要『アメリカ歴史の旅 イエスタデイ&トゥデイ』(朝日新聞社、1987年)
- 高橋章・加茂雄三編『南北アメリカの500年 2 近代化の分かれ道』(青木書店、1993年)
- ホイジンガ, J. 著、橋本富郎訳『アメリカ文化論 個人と大衆』世界思想社、1989年)
- ベットマン,オットー・L.著、山越邦夫・斉藤美加ほか訳『目で見る金ぴか時代の民衆生活 古き良き時代の悲惨な事情』(草風館、1999年)
- Michelson, Bruce. *Printer's Devil: Mark Twain and the American Publishing Revolution*. Berkeley: U of California P, 2006.
- Norton, Mary Beth et al. *A people and a Nation: A History of the United States*. Sixth ed. Boston: Houghton Mifflin, 2001.
- LeMaster, J. R. and James D. Wilson eds. *The Mark Twain Encyclopedia*. New York: Garland, 1993.
- Prince, April Jones. *Who Was Mark Twain?* New York: Grosset & Dunlap, 2004.

Mark Twain's Works

- Twain, Mark. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*. Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.
- - -. *Following the Equator*. Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.
- - -. *Mark Twain's Letters, Volume. 5: 1872-73*. Ed. Lin Salamo and Harriet Elinor Smith. Berkeley: U of California P, 1997.
- - -. *Mark Twain's Own Autobiography*. Ed. Michael J. Kiskis. Madison: U of Wisconsin P, 1990.
- - -. *The Prince and the Pauper*. Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.
- - -. *Roughing It*. Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.
- Twain, Mark and Charles Dudley Warner. *The Gilded Age: A Tale of To-Day*. Ed. Shelly Fisher Fishkin. New York: Oxford UP, 1996.